

港と観光

——神戸市・北野地区の事例・南京町・旧居留地——

鶴田雅昭

Tourism and Port

——Historical inheritance and tourism of harbor city Kobe——

Masaaki TSURUTA

キーワード：港湾都市の観光、歴史遺産の保全とその活用、民間組織の主体的集客活動

はじめに

港はそれ自体が観光と結びつくものではない。結びつくとすれば、それは港内を巡航する遊覧船だけであろう。戦後の高度成長期に開港した各地の工業地帯に隣接する港が観光と無縁の理由はそこにある。港が観光と結びつくのは、港町の歴史的役割が明確である、或いは観光資源が隣接しているなどに加えて、現在でも港と機能している場合に限られる。これらの事例として、前者では本港で考察した神戸のほか函館、横浜、長崎その他を、後者では宮城の松島、伊勢志摩、下関・小倉ほかを挙げることができる。

本港では、港と観光について、神戸を事例として考察する。神戸市は関西に位置する、わが国を代表する国際港湾都市の一つである。同じ関西に位置する大阪市と比較すると、両都市ともに大規模な港湾施設を有する点で共通するが、「港と観光」という視角から両都市に共通するものは港湾を巡る観光船しかない。近年、両都市ともにベイエリアの開発が盛んではあるが、似て非なるものと言える。では、何が都市観光でその資源となるのであろうか。それは都市の形成・発展過程、即ち都市の歴史に求めることができる。都市が如何に形成され、発展し、今日に至ったかは、それぞれに相違する。その相違が都市の特徴を生み出し、それが都市観光の資源となるのである。この点については大都市も地方都市も大差はない。

古くから商業都市として発展した大阪は、各地物産の集積地であったことから独特の食文化が形成され、それが今日の大阪市における観光資源の一つとして大きな役割を果たしている。加えて、大阪に繁栄をもたらした豊臣秀吉の大阪城や明治期の勧業博覧会の遺産である通天閣なども、大阪の観光において果たす役割は大きい。これに対して、本稿で考察する神戸市に今日の発展をもたらしたのは、慶応3（1868）年の兵庫開港であった。運上所（税関）が設けられ、これを契機に横浜とともにわが国を代表する国際港湾都市として発展した。開港によって数多くの外国人が来航し、居留地が造成されることになった。しかし、その造成・整備の遅れから、外国人の多くは住居を居留地周辺に求めざるを得なく、幾つかの雑居地が誕生した。南京町・北野地区もその一つである。

そこで本稿では、「港と観光」という視角から、国際港湾都市として発展した神戸を対象とし、その歴史遺産を観光資源として活用する旧居留地・南京町・北野地区について、そこでは誰が、どのような活動を展開しているかを明らかにしたい。

1. 神戸市の観光とその動向

神戸市の観光エリアは、東は六甲から西は須磨・舞子にまで及び、六甲山の裏側には関西屈指の温泉地の一つであ

表1 地域別入り込み観光客数

単位：1万人・%

	10		11		12		13		14		15	
市街地	700	27.7%	760	29.3%	731	29.0%	719	26.3%	840	32.2%	919	34.4%
うち北野	157	6.2%	161	6.2%	160	6.4%	153	5.6%	151	5.8%	145	5.4%
神戸港観光群	269	10.6%	260	10.0%	257	10.2%	246	9.0%	258	9.9%	162	6.1%
六甲・摩耶	497	19.7%	504	19.4%	482	19.1%	488	17.8%	461	17.7%	496	18.6%
有馬	136	5.4%	133	5.1%	128	5.1%	129	4.7%	131	5.0%	170	6.4%
須磨・舞子	324	12.8%	342	13.2%	393	15.6%	374	13.7%	359	13.8%	349	13.1%
西北神観光群	110	4.4%	108	4.2%	104	4.1%	98	3.6%	100	3.8%	117	4.4%
神戸ルネナリエ	492	19.5%	486	18.7%	424	16.8%	462	16.9%	423	16.2%	456	17.1%
21世紀復興記念事業	0		0		0		223		0		0	
2007ワールドカップ	0		0		0		0		34	1.3%	0	
タイムズメリケン												
神戸ビエンナーレ2007												
神戸空港ターミナルビル												
全市	2528	100%	2593	100%	2519	100%	2738	100%	2606	100%	2669	100%
	16		17		18		19		20		21	
市街地	1061	37.7%	1066	39.0%	1091	37.4%	1101	38.8%	1216	42.5%	1249	41.4%
うち北野	161	5.7%	138	5.1%	158	5.4%	161	5.7%	160	5.6%	149	4.9%
神戸港観光群	154	5.5%	146	5.3%	143	4.9%	160	5.6%	146	5.1%	190	6.3%
六甲・摩耶	489	17.4%	456	16.7%	466	16.0%	496	17.5%	502	17.5%	503	16.7%
有馬	163	5.8%	159	5.8%	159	5.4%	160	5.6%	158	5.5%	147	4.9%
須磨・舞子	350	12.4%	358	13.1%	370	12.7%	373	13.1%	362	12.7%	473	15.7%
西北神観光群	103	3.7%	105	3.8%	102	3.5%	117	4.1%	141	4.9%	134	4.4%
神戸ルネナリエ	492	17.5%	395	14.5%	419	14.3%	368	13.0%	336	11.7%	319	10.6%
21世紀復興記念事業	0		0		0				0		0	
2007ワールドカップ	0		0		0		0		0		0	
タイムズメリケン			45	1.6%	2	0.1%	0		0		0	
神戸ビエンナーレ2007							14	0.5%				
神戸空港ターミナルビル	0				168	5.8%	52	1.8%	0		0	
全市	2812	100%	2730	100%	2920	100%	2841	100%	2861	100%	3015	100%

出店：『神戸市統計書』神戸市企画調整局企画調整部総合計画課編・刊、平成9年から平成21年の各年度より作成。

る有馬温泉がある。表1は平成10年度から21年度に至る12年間の神戸市における各観光エリアの入り込み数を示したものである。そこでは神戸市全エリアへの入り込み客観光者数とその変化を見ると、前年度との比較で平成12年度、14年度、17年度はマイナスに転じているが、その他の年度はプラスを示し、平成10年度の2,528万人に対して21年度は3,015万人へと500万人程度増加している。

まず市街地の入り込み観光者数を見ると、平成12年度と13年度に減少が見られるものの、それ以降は一貫して増加し、構成比では平成13年度までは20%後半、14年度と15年度が30%前半、16年から19年度には30%後半で推移し、20年度以降は40%を越えている。市街地の中では唯一北野が示されている。観光者数から見ると、平成10年度が157万人、11年度が161万人であったが、平成12年度から毎年減少し、15年度には145万人に減少している。16年度は11年度とほぼ同数の161万人に戻したが、17年度には138万人に減少した。18年度から20年度に至る3年間は160万人前後で推移し、21年度には150万人を下回っている。構成比では、10年度から12年度では6%台、13年度から20年とまでは5%台、21年度には4%台に減少している。

市街地に次いで、六甲・摩耶エリアと神戸ルネナリエの観光客が多い。前者の六甲・摩耶エリアは夏場に観光者数

が多く、後者の神戸ルミナリエは阪神大震災の年より、被災者に対する慰霊や復興に明かりをともしようという意図で、12月初頭からクリスマス時期にかけて旧居留地で開催される、大規模なイルミネーションのイベントである。六甲・摩耶エリアから見ると、観光客数では平成10年度には497万人、11年度には504万人であったが、12年度から13年度には480万人台、14年度には460万人台に減少した。15年度に496万人まで持ち直したが、16年度489万人へと若干減少し、17年度には456万人まで落ち込んでいる。しかし、18年度には466万人へと微増し、19年度が496万人、20年度が502万人、21年度が503万人へと増加している。構成比では、10年度から12年度にかけて19%台、13年度から16年度までは17%台、17年度と18年度には16%台に減少し、19年度と20年度は17%台に戻したが、21年度には再び16%台へと転じている。

他方、神戸ルミナリエは開催日数や、屋外での催し物のため天候によって観光者数が増減する。平成16年まではクリスマスを終日としていたが、17年以降は周辺の将棋施設に対する配慮から開催時期を繰り上げ、クリスマス直前で終了している。まず観光者数から見ると、平成10年度と16年度の492万人が最も多く、この間の各年度は400万人台の後半と前半を繰り返しつつ推移していたが、17年度以降は開催期間の短縮が影響し、17年度395万人、18年度が419万人に減少し、19年度に368万人、20年度に336万人、21年度に319万人へと大きく減少している。そのため、構成比でも、10年度19%台から、11年度に18%台、12年度と13年度が17%弱、14年度では16%程度に減少し、15年度と16年度は17%台に増加したが、17年度と18年度には14%台、19年度が13%台、20年度は11%台、21年度には10%台に減少している。

神戸港観光群とはメリケンパークおよびハーバーランドなどにある各施設の総称にほかない。まず観光客数を見ると、平成10年度の269万人が最も多く、11年度が260万人、12年度が万人、13年度が246万人と減少傾向を示し、14年度に258万人と若干増加したが、15年度以降は同年度が162万人、16年度154万人、17年度143万人、18年度160万人、20年度146万人と低迷を続け、21年度には190万人に戻っている。構成比では、平成10年から12年にかけて10%台で推移し、13年には9%に減少したが、14年に10%程度に戻っている。しかし、15年度以降は年度が6%、16年度と20年度にかけて5%程度で推移し、21年度には6%台であった。

このほか主要なエリアとして、有馬と西北神観光群の観光客数が示されている。このうち有馬と北野の観光客数を比較すると、平成10年度から14年度にかけて有馬は市街地北野を下回り、平成15年度は15万人程度有馬が北野を上回ったが、16年以降は両エリアの旅客数が拮抗している。構成比についても、同様の様相を示している。いまひとつの西北神観光群については、平成10年度以降の観光客数の比較で常に北野を下回っている。他方、新たな事業として、タイムズメリケンと空港ターミナルビルなどがあり、前者は17年に45万人、18年に2万人、後者は18年度に168万人、19年度に52万人を集客している。このほか単年度の事業として、13年度に21世紀復興記念事業の223万人、14年度にサッカー・ワールドカップの34万人、19年度に神戸ビエンナーレ2007の14万人などが示されている。

以上見てきた8つのエリアおよび単年度事業の推移を踏まえて観光客数の対前年度増減を見ると、11年度は市街地、六甲・摩耶、須磨・舞子の3エリアが増加し、神戸港観光群、有馬、西北神観光群、神戸ルミナリエの4が減少している。神戸市全体では65万人の増加であったが、その大半は市街地の増加によるものである。12年度は、須磨・舞子エリアでのみ増加が見られるが、他の6つのエリアは減少を示し、とりわけ神戸ルミナリエが大きく落ち込み、市街地と六甲・摩耶がそれに続いたため、その結果として神戸市全体で74万人減少している。13年度は、六甲・摩耶、有馬、とりわけ神戸ルミナリエが増加に転じたが、市街地など4つのエリアの減少をカバーするに至らず、単年度事業の21世紀復興記念事業が神戸市全体で219万人の増加をもたらした。14年度は、市街地、神戸港観光群、有馬、西北神観光群の4つのエリアが増加に転じたものの、単年度事業であった21世紀復興記念事業分のマイナスが影響し、神戸市全体で132万人の減少となった。

翌15年度は神戸港観光群が大きく減少したが、市街地、六甲・摩耶、有馬エリアが好転し、神戸市全体で63万人増加した。16年度は、市街地をはじめ3つのエリアで増加し、4つのエリアが減少したが、その幅が大きくなかったため、神戸市全体では143万人の増加している。17年度は単年度事業でタイムズメリケンの集客分が加わったが、市街地をはじめ3エリアが微増に止まり、4つのエリアとりわけ神戸ルミナリエが大きく減少したため、神戸市全体では82万人の減少となった。18年度は、タイムズメリケン分が大きく減少したものの、市街地をはじめ3エリアで増加し、

神戸空港ターミナルビルの集客分が加わったため、神戸市全体では190万人の増加が見られる。19年度は、六甲・摩耶をはじめ6つのエリアで増加し、神戸ビエンナーレ2007分が加わったが、神戸ルミナリエと神戸空港ターミナルビルが大きく減少したため、神戸市全体では79万人の減少となった。20年度は、3つのエリアで増加が見られ、とりわけ市街地が大きく増加したため、4つのエリアと神戸ビエンナーレ2007分の減少にもかかわらず、神戸市全体では20万人の増加となった。21年度は、有馬、西北神観光群、神戸ルミナリエの3エリアが減少したものの、須磨・舞子をはじめとする4つのエリアが増加したため、神戸市全体では154万人増加している。

以下では、神戸市の入り込み観光客の動向を踏まえ、そのなかでも平成10年度と比較して20年度には大きく増加している市街地エリアについて、北野・旧居留地・南京町を事例として、そこでどのような取り組みがなされているかを考察する。

2. 北野・山本地区の景観保存と観光

北野・山本地区とは神戸市中央区北野町1丁目から4丁目および、山本通1丁目から3丁目に至る地域をいう。北野という名称は平清盛が福原遷都に際して京都北野天満宮を勧請したことに由来する。開港地の一である神戸では、港周辺で居留地の造成が計画されたが、その実施の遅れから居留地周辺の雑居地に永代借地を得て、そこに住居を構えた外国人は少なくなかった。北野・山本地区も雑居地の一つである。それ故に、同地区では和風建築も数多く存在し、洋風の異人館と混在していた。こうした和風建築と洋風建築の混在は同地域の特徴と言えよう。

北野・山本地区で異人館が数多く建設され始めるのは、明治20年代以降であった。20年代に建築された異人館として、旧ビショップ邸、旧リスレフセン邸、旧ハンセル邸などを挙げることができる。30年代の建物では、アメリカ領事館官舎、オーバーライン弟邸、旧ハッサム邸、旧シャープ邸などがある。大正期になると、初期ははまだ明治期の様式による建物もあったが、後半から昭和初期にはモルタル塗り外壁の洋館が建築されるようになった。その事例として、前者ではラインの館が、後者ではうろこの館などがある⁽¹⁾。

北野は居留地に比較的近く、山手にあることから港が一望できるため、ここに居を構えて居留地に出勤するというライフスタイルをとる外国人が多数いた。明治期から昭和初期に至る間に北野・山本地区で建築された異人館は200棟を越えた。しかし、第2次世界大戦には国外退去や母国への期間により、邦人の所有となった洋館が増加した。大戦末期には空襲による焼失などで、山本通りから海側に位置した建物の多くは甚大な被害を被ったが、山側では被害を免れた建物が少なくなかった。今日、北野・山本地区で山本通りより山側に異人館が集中する理由はそこにある。

北野・山本地区での異人館の保存運動は、昭和35年7月、東京大学教授関野克をはじめ建築史を専門とした学者による、当時の神戸市長に宛てた神戸女子短大寮（旧ハッサム邸）に対する保存の要望に始まる⁽²⁾。神戸市は旧ハッサム邸を当時の所有者である回教寺院から無償で譲り受けて移築保存した。この間に同邸は国の重要文化財として指定を受けていた。翌36年には旧ハンター邸の取り壊しが問題視され、保存が要望された。これに対して、坂本勝県知事は王子動物園への移築保存を決定し、実施した。この旧ハンター邸も41年6月に国の重要文化財指定を受けている。このほか同時期に移築保存された異人館として、旧バルム邸がある。その反面で、この時期には移築が不可能のため取り壊された異人館もあった。

こうしたなかで、昭和50年8月に発足した北野・山本地区伝統的建造物群保存調査会は文化庁の助成と奈良国立文化財研究所の協力を得て現地調査を行い、これをもとに保存に関する基礎資料を作成するとともに、行政に対し同地区の景観及び異人館等の保全について提言した。その内容は同地区に対する文化財保護法にもとづく伝統的建造物群保存地区指定の取得を示唆するものであった。神戸市は53年10月に都市景観条例を制定し、翌54年10月に同地区を都市景観形成地域に指定した。このうち異人館が比較的多い地域が55年4月に伝統的建造物群保存地区として指定されている。

当時、若い女性の人気を集めた週刊雑誌『an an』や『NON NO』が特集記事として異人館を取り上げ、加えて、昭和52年秋、NHKが朝の連続ドラマで「風見鶏」を放送した。雑誌で取り上げられ、連続ドラマで舞台となった北野・山本地区は急速に観光地化し、その対策として神戸市は53年7月に白い異人館（現萌黄の館）を借り上げて一般公開した。続いて現風見鶏の館を、その所有者であった中華同文学校より買い上げ、同年12月より公開している。また、

同市教育委員会では、空きや状態にある現ラインの館を買い上げ、修復の後に異人館観光の拠点として、53年11月より公開した。加えて、同市観光課は異人館ガールを採用して案内やイベントなどに当たらせるなど、異人館の広報活動に努めている⁽³⁾。

異人館観光の増加は北野・山本地区に新たな問題をもたらした。違法駐車やごみ問題など観光公害がそれである。これに対して、56年に同地区の自治会・婦人会・商業者などによって「北野・山本地区をまもり、そだてる会」が結成された。同会の目的は、観光地化が進展するなかで、居住地としての北野・山本地区の景観や環境を如何に保全するかにあった。同会は神戸市より都市景観条例にもとづく景観形成市民団体第1号として認定された組織であった。56年より毎月1回地区の清掃を行う「クリーン作戦」を実施し、58年より全国に先駆けて「ノースモーキングゾーン」を設定した。後者は当初、一部の箇所に限られていたが、平成元年より地区全域に拡大した。このほか、64年より主にゴールデンウィークにおいて「迷惑駐車・迷惑タクシーをなくす運動」を、平成2年より「迷惑看板・自動販売機等をなくす運動」などを展開し、同地区の景観と環境の保全に努めている⁽⁴⁾。

その一方で、「北野・山本地区をまもり、そだてる会」は、平成元年より「北野・山本まちなみフェスタ」を開催し、同地区の実情告知とともに、集客に努めている。その具体的な内容は、スタンプラリー、市民作品展、パネル展示、ミニコンサート、シャンソンの集い、バザー、ガレージセール、青空市その他であった。

平7年1月の阪神大震災は、北野・山本地区の歴史的建造物に被害をもたらした。10棟程の異人館が解体され、36棟で何らかの修復を必要とした。そのうち洋風建造物が29棟、和風建造物が7棟で、それぞれ破損度を大別すると、前者は破損度大が9棟、同じく中が11棟、小が9棟、後者の破損度は全て小であった。これらの修復はその多くが国庫助成事業として行われている。震災前に公開されていた異人館は26館であったが、震災から2年を経た平成9年には24館が修復を終えて再び公開されていた⁽⁵⁾。「北野・山本地区をまもり、そだてる会」は震災直後より、伝統的建造物に指定されていない異人館などへの支援を目的とする「異人館基金」を設けて募金活動を展開し、平成9年には伝統的建造物に指定された異人館等に対して銘板の設置を開始した。このほか同会では、平成4年に開始した春に種苗等を配布する「花と緑を増やす運動」、6年に始まる「まちの記憶を引き継ぐ運動」を展開している。これらは地域住民に対する意識を統一するための活動にほかに、震災後も続けられている。

こうした「北野・山本地区をまもり、そだてる会」のうち環境保全は、居住民に対する制約となるものであったが、緑化運動を含めて考えると雑居地時代の面影を維持するとい役割を果たすものでもあったと見てよい。それは地域の観光資源を如何に活用するか、言い換えると単に個々の洋館を見せるという点の観光ではなく、旧雑居地という面の観光空間を創造したと言えよう。

3. 旧居留地の環境保全と観光

港湾都市神戸は慶応3年12月（1868年1月）の開港に始まるが、来航する外国人に対する居留地は、当時の市街地兵庫から少し張られた神戸村に造成された。その広さは、東西が生田川から鯉川筋に至る、南北が西国街道から河岸に至る、約500m四方であった。居留地の造成はイギリス人技師J・W・ハートによって、ヨーロッパの都市をモデルとする造成が行われ、街路樹や公園・街灯などのほか、レンガ造りの下水道までも整備されていた。このうち下水道は日本で最古のものとして、15番館とともに国の重要文化財に指定されている。

居留地には領事館や商社などのほか、色々な企業や商店があった。ホテルや洋服店（テーラー）もその一つである⁽⁶⁾。前者では明治3年に79番地で創業した神戸オリエンタルホテルが挙げられる。同ホテルは日本最古の近代的ホテルである。創業者はドイツ人のフェリエであったが、数人の外国人経営者を経て、大正5年に邦人の経営となった。後者については、市役所に隣接する東遊園地に「近代洋服発祥の地」の記念碑がある。

明治32年7月、居留地が返還されることになり、これとともに居留地財産も日本政府に引き渡され、遊園地やガス燈などは神戸市に引き継がれた。返還を契機に商社・海運会社その他が旧居留地に進出し、日本企業が次第に増加し、大正期から昭和戦前期にはビルが建ち並び、オフィス街へと変化した。しかし、第二次世界大戦期には終戦直前の空襲で被災し、戦後期には多くのビルが駐留軍施設として接収された。接収施設が全面返還されたのはサンフランシスコ講話条約発効直後の昭和27年8月であった。昭和30年代中頃に始まる高度経済成長は旧居留地に空洞化をもたらし

たが、50年代末頃から次第に、大正期から昭和戦前期に建てられた近代建築物がまだ残る旧居留地のレトロ感覚が見直され、飲食店やブティックなどが増加した。

こうしたなかで旧居留地は、昭和58年6月に神戸市より都市景観条例に基づく「都市景観地域」に指定された。その目的は、歴史と風格があり、かつ都心業務地にふさわしい、賑わいのある街並みの形成であった。「都市景観地域」によって、旧居留地では同地区内でビルの新築および増改築を行うには神戸市への届け出が必要となった。そこで、昭和58年3月に、戦前期において旧居留地のビルオーナー達によによって親睦を目的として組織化され、戦後期には「国際地区共助会」と改称した団体を「旧居留地連絡協議会」（以下、「協議会」と略称する）へと発展させ、歴史的・景観的資源を活用した街づくりを目指した⁽⁷⁾。

その最初の計画が旧居留地メインストリートの中町通プロムナード化である。(1) 中町通は市役所南側にある東遊園地裏から三井住友銀行を経て大丸に至る、旧居留地を東西に横切る中央通りであった。中町通プロムナード化は緑地化や照明灯・道路標識の充実を図り、加えて東遊園地旧居留地側に入り口を設け、中町通を遊歩道にするというものである。「協議会」は市当局に東遊園地の旧居留地側玄関口設置を要望した。「協議会」の要望は神戸市が新庁舎建設を契機に実施した東遊園地の整備事業のなかに採り入れられ、同公園の旧居留地側に玄関口が造られて、中町通がプロムナード化した。平成元年4月に旧太陽神戸銀行本店で始まるプロムナードコンサートは、今日でも三井住友銀行まで続けられている。株式会社ノザワが所有する、神戸最古の洋風商館でもある15番館は1989年に重要文化財の指定を受けている⁽⁸⁾。平成2年に「協議会」は、京町筋と前町通が既に景観形成道路と位置づけられていることを踏まえ、明石町筋と中町通を加えた4つの道路を軸とする「まちづくり計画について」を神戸市へ提案した。その内容は、明石町軸を商業地、京町軸を業務地（オフィス街）、中町軸を東から西へのメインストリート、前町軸を歴史的散歩道として位置づけるというものであった。

平成7年1月の阪神大震災は旧居留地の近代建築物のいくつかに大きな被害をもたらした。その復興で「協議会」が目指したのは、居留地を「風格ある働きやすい街、何度も訪れたい街に」であった。そのために同会が策定した復興計画では、①都心中枢業務地としての地位の強化と魅力化、②都心防災拠点地区の形成、③歴史をいかした風格あるまちなみの形成の三つがポイントとされていた。このうち、「何度も訪れたい街に」への具体的施策として、①では通行規制や駐車対策を実施する、歩行者優先道路を策定して商業施設を誘致する、広告物や日よけテントに対するガイドラインを策定し街並みの演出要素として活用するなどが、③では居留地時代の敷地割に基づくボリューム感を壊さない建物規模とする、道路ごとに中層階を統一する、時代の変化にともなって風格を増す材質・意匠とする、開放型広場の設置場所を限定して街区に内包される広場空間をつくるなどが挙げられていた⁽⁹⁾。

こうした大規模災害課の復興が推進されるなか、平成7年12月に震災復興と観光復興を願う「神戸ルメナリエ」が旧居留地を中心に開催され、クリスマスまでの11日間で245万人を集客した。このイベントは神戸の笑いと希望を象徴する風物詩として定着した。しかし、近年では周辺商店街への影響を考慮し、12月上旬から中頃にかけての開催へと変更されている。また、「神戸ルメナリエ」はその電飾に巨額の費用を要することから、資金不足を理由に来年度の開催が危ぶまれている。「神戸ルメナリエ」の近年の集客数は、先の表1に示した通りである。

震災から2年を経た平成9年になると、被災した建物の再建が進展する。それらのビルでは「協議会」が策定したガイドラインに沿い、デザインや健在を工夫し、旧居留地の雰囲気合う建物であり、そこでは敷地の一部を公共広場に提供する企業も少なくなかった。他方で、神戸市が計画する新神戸から北野地区、トアロードを経て旧居留地へと続く、光の回廊の一環として、「協議会」はガス灯通りづくりを推進した。さらに、旧居留地マップ、街路標識、ビル敷地ごとの地番や歴史のエポックを紹介する個別名盤などの設置を計画し、ビルオーナーの協力を得て実施した⁽¹⁰⁾。

旧居留地を会場とする、或いは会場の一部とする大規模イベントとしては、平成11年に開催された神戸居留地返還100年祭、平成13年に神戸21世紀・復興記念事業として開催された「KOBE 2001」がある。前者は平成11年7月に記念式典と祝賀会が、続いて9月11日から10月11日にかけて各種イベントが開催された。また、後者では、市立博物館や商船三井ビルなどで「クロモリット KOBE」が開催され、これに併せて旧居留地がライトアップされたほか、街角ファッションショーなども開催されていた。

平成15年には新たなイベントとして、旧居留地フリーウォークが始まった。当初は歩行者天国に止まったが、17年

には「震災10年 神戸からの発信」一環として開催され、そこでは震災時写真展示、被災者を追悼する鎮魂の歌や音楽、龍舞・獅子舞なども実施されたのであった。このほか「協議会」では、緑化活動・クリーン作戦・アイドリングストップ運動などを通じて、旧居留地の環境保全に努めている。こうした「協議会」を中心とする景観や環境保全運動によって、旧居留地は都心のオフィス街・商業街でありながら、近代建築物を利用したブティック・飲食店などもある、異国情緒あふれる街として維持されているのである。そこは単なる観光地域ではなく、居留地時代の面影を残す異文化理解の地であると言える。

4. 神戸南京町の商業振興と観光

神戸南京町は、横浜・長崎とともに、日本三大中華街の一つである。後者が横浜中華街、長崎中華街と呼ばれているのに対し、神戸は中華街ではなく、「南京町」と呼ばれているところに特徴がある。南京町の誕生は、慶応3（1868）年の兵庫開港にさかのぼる。当時、日本と清国の間に条約が締結されていなかったため、来航した清国人の多くは居留地に隣接する雑居地、現在の鯉川筋（メリケンロード）から西側、北は元町本通り、南は栄町通りに挟まれた一角に居を構え、雑貨や食料品の販売、飲食店などを営み、市場を形成したことに始まる。南京町という呼称は、この市場が一般に「南京街」、あるいは「南京町」と呼ばれたことに起因する。この神戸南京町は横浜中華街と比較して規模が小さく、地域に關帝廟などがいないことなどが相違点として挙げることができる。

第二次大戦前期の南京町は、そこへ行けば何でもあると言われる程であったが、終戦を間近に控える昭和20年の神戸大空襲で灰と化した。第二次大戦直後いち早く闇市が形成され、市場へと発展した。外国船の入港増加とともに、船員相手の飲み屋が増加し、中華料理店が一件だけという時期もあった¹¹⁾。1977年にNHKが放映した朝のドラマの「風見鶏」が契機となり、その舞台となった北野・異人館が脚光を浴び、他方で「ポートピア81」の開催が決まり、神戸の異国情緒が注目された。こうしたなかで南京町を観光地化する機運が高まり、南京町商店街振興組合が創設されたのである。

南京町商店街振興組合が手がけた最初の事業は南京町復興環境整備事業であった。同事業は道路拡張にともなう区画整理のため土地の4分の1を提供し、地元負担分として巨額の費用を必要としたため、その調整には4年程度を要し、1981年に町づくりが始まった¹²⁾。現在の南京町広場を中心に道路が整備され、1982年に南側「南楼門」（海栄門とも呼ばれている）、翌83年に南京町広場の「あづまや」が完成し、85年に東側の鯉川筋に「長安門」が竣工した。長安門は中国が海外輸出を許可した最初の漢白玉楼門で、「長安門」の文字は当時の神戸市長宮崎辰雄氏によるものであった。この時期に今日の南京町が形づけられたのである¹³⁾。

こうしたなかで、南京町商店街振興組合青年部は1987年に「神戸南京町春節祭」を計画し、実施した。この春節祭は商工会議所や隣接する大丸百貨店からイベント運営その他を教わり、見よう見まねで龍舞を練習するなど、同組合青年部による手作りのイベントであった。第1回春節祭は閑散期にもかかわらず27万人を集めるほどであった。この春節祭は阪神大震災が発生した1995年には中止を余儀なくされたが、1997年には神戸市地域無形民俗文化財に指定され、今日においては南京町を代表する行事の一つとして定着している。春節際には、龍舞や獅子舞、舞踊や音楽太極拳のほか、中国史人遊行とよばれる京劇の化粧と衣装による歴史上の人物のパレードなどが行われている。その役柄は、男性が玄宗皇帝・項羽や三国志の主要人物など9名、女性が楊貴妃・西太后をなどであった。それぞれの役柄は18才以上の一般応募者から選ばれた。このほか春節祭前日のプレイベントとして、三宮や元町方面への龍のパレードが行われている。

このほか南京町の行事には、1996年に始まる南京町ランターンフェア、1998年に始まる「中秋祭」、2007年から始まる興隆春風祭などがある。南京町ランターンフェアは緑色の中華灯笼でメインストリートを装飾するというもので、毎年「神戸ルネナリエ」の時期に開催されており、今年（2013）は12月4日から25日（クリスマス）まで開催されるようである。「中秋祭」は、旧暦の8月15日（十五夜）に豊年を祝う祭りとして開催されたもので、南京町広場に祭壇が設けられ、西遊記の登場人物4人に導かれて参拝し、参拝後に彼らと一緒に記念写真を撮影できる。このほか龍舞・獅子舞、太極拳の模範演技その他アトラクションが十五夜とその前日の2日間に渡って行われている。興隆春風祭は3月の日祝日に開催されているイベントで、その始まりは2006年の神戸空港開港1周年記念行事であっ

た。そこでは春節祭や中秋祭と同様に、龍舞・獅子舞・太極拳の模範演技などを見ることができる。

今ひとつ南京町で開催されているイベントとして、「KOBE 豚饅頭サミット」とがある。このイベントの主催が南京町商業振興組合でなく KOBE 豚饅頭サミット実行委員会であったところが、先述の春節祭を始めとする各イベントと相違している。南京町で同サミットが開催される理由は、日本で最初に肉饅頭が神戸で製造され、豚饅頭と名付けて販売されたことにある。サミット実行委員会は、豚の鼻の形が11に見えることから、それを二つ並べた11月11日を「豚饅頭の日」と制定し、日本記念日協会に申請して認可を得ている⁽¹⁴⁾。これをもとに、「豚饅頭サミット」は11月11日とその前後の時期に開催されており、今年で3回目となる。このサミットには南京町の中華料理店だけでなく、神戸の老舗中華料理店や横浜・長崎の中華街のほか、仙台からの参加者や大学・専門学校などからの参加者おり、それぞれがオリジナルの豚饅頭を製造し販売している。このほかイベントの一環として、豚饅頭娘コンテストやシンポジウムなども開催されている。

ところで、南京町商店振興組合と同組合が実施するイベントについて、公式ガイドブックに掲載されている座談会「南京町に生きる」を見ると、参加者の1人である沢口さんによる「旧正月を祝って踊ることも、中秋に家族円満を願って月餅を食べることも、南京町でやっているのは「流行の商売」ではなく、「文化の商売」なんやと思っています。」という発言があり、組合長の曹は「南京町には「本物」があるといこと。……素敵な思い出と良い気を持って帰っていただけるよう、熱烈歓迎いたします。」⁽¹⁵⁾という言葉で締めくくっている。曹さんに対する聞き取り調査では、「私たちの目先は観光客ではありません。流行（観光客）は変化します。舌の肥えた神戸の人々です。」⁽¹⁶⁾という説明があった。そうだとすれば、南京町の各イベントは神戸市民と一体となった盛り上がりを意図したものにはほかなく、地方からの観光集客は地元神戸市民との盛り上がりの延長線上に位置すると言えよう。

おわりに

神戸市における市街地観光、とりわけ北野・山本地区、旧居留地、南京町は、国際港湾都市として発展を遂げた同市の都市遺産を活用した結果であると言ってよい。そこでは地域住民や各企業、或いは商業振興組合などを主体とする、環境保全や文化の伝承という地元組織の自主的活動があった。少なくともこれら三つの地域では、地元各組織による主体的活動を神戸市が補佐し、市街地観光を活性化したのである。そこで注目すべきは、観光資源が居留地・雑居地という国際港湾都市の遺産を観光資源としたもの、南京町は中華街というにおける異国文化を観光資源としたものにほかなない。こうした国際港湾都市の遺産、あるいは異国文化の観光資源化という視角から見ると、神戸の市街地観光とりわけこれら三地域の観光は、見せるという観光ではなく、異文化理解あるいは異文化交流を目的とするツーリズムであると言っても過言ではない。

注

- (1) 『異人館のある町並み北野・山本』神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課編・刊、2000年3月、24頁参照。
- (2) 前掲『異人館のある町並み北野・山本』26頁。
- (3) 急速な観光地化にともなう神戸市教育委員会による一連の対応については、同前31頁を参照。
- (4) 北野・山本地区の市民活動については、同前76-77頁を参照。
- (5) 阪神大震災による被害に対する復旧および、その後の市民活動については、同前77-80頁を参照。
- (6) 居留地会議 NO.6」居留地協議会会報（以下、会報と略称する）、1990年10月25日、4頁。（<http://www.kyoryuchi-club.com/modules/tinyd0/index.php?id=8> アクセス2013年12月20日）
- (7) 前掲「会報 NO.1」1988年2月10日、1頁。
- (8) 前掲「会報 NO.10」1993年3月23日、3頁。
- (9) 同前「会報 NO.12」1995年10月27日、2-3頁。
- (10) 同前「会報 NO.16」1997年10月22日、2頁。
- (11) 「南京町公式ガイドブック」南京町商店街振興組合発行、3頁。
- (12) 前掲、「南京町公式ガイドブック」3頁。
- (13) 2013年11月17日、南京町商店街振興組合理事長、曹英生氏に対する聞き取り調査による（場所は老祥記）。
- (14) 前掲、曹英生氏に対する聞き取り調査による。
- (15) 前掲、「南京町公式ガイドブック」6頁。
- (16) 前掲、曹英生氏に対する聞き取り調査による。